



Title	北海道の野球はなぜ強いのか
Author(s)	濱田, 康行
Description	巻頭言
Citation	信用組合, 53(11), 2-3
Issue Date	2006-11
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/15887
Type	article
File Information	shinyo53-11.pdf



北海道の野球はなぜ強いのか

ひと昔前まではこんな光景があった。甲子園の高校野球大会の組合せ抽選会。相手が北海道のチームとわかると本州の高校球児達から歓声があがった。相手は弱いからとりあえず一勝したのも同然というシンプルな喜びなのだ。これまでの常識は、北海道は冬が長く半年の間は野球の練習なんてできない。やはり練習できないと弱いのがスポーツ。事実、弱かった。夏の大会だと、ほとんどが初戦で負ける。それも大敗がほとんど。かの PL 学園に 20 点近くとられたのが記憶に残っている。そして、しょぼんとした彼らが北海道に帰ってくると、既に季節は秋、空には赤トンボが飛ぶのである。だから初戦敗退はきまりきった秋の風物詩だった。

それがどうだ。なかなか帰って来ないどころか二度も全国優勝し三度目もあわやというところまでいった。

プロ野球でも同様。日本ハムという万年下位低迷のチームが巨人軍の裏番組という後楽園球場での面白くない役割を捨てて全国を彷徨った末の札幌移転だった。それはわずかに 3 年前。420 億円かけた札幌ドームは、“あんなもの使えない” “使用率は低い” と評判は散々だったけど、いまでは誰も文句はいわない。北海道日本ハムという球団名も “北海道” を無理矢理つけたようで初めのうちは違和感があったが、それもどこかに吹き飛んだ。強くなるというのはすごい事で、これまで巨人ファンだった北海道人は豹変した。最たるものは地元の新聞社だ。ファイターズの選手のヘルメットには新聞社の名前が書かれている。

確かに強くなった。リーグ優勝を果たし、ついに日本一になってしまった。どうしてこんなに強くなったのか。それはグローバリズムに関係がある。突然、何を言い出すのかと怒られそうだが、少し私見を聞いて頂きたい。

グローバリズムの入口は、人の移動が自由になる事である。よく、財、カネ、ヒトの三要素というが前二者の移動はかなり前から活発であった。問題はヒトである。これが、交流手段の発達、そしてなにより情報の “どこでも化” によってようやく達成されたのである。ファイターズを見てみよう。監督はアメリカ人、人気の SHINJO は福岡県出身、球団の親会社はなんと四国なのだ。高校野球だって、かの田中投手は神戸からの野球留学組だ。

そして、グローバリズムが完成するのは移動した人々がそこに定着する事だ。それには定着する土地と人々がある条件を持っていなければならない。それは受容力だ。北海道の歴史はせいぜい 150 年で、実は皆、よそ者だ。因習も（その分、歴史と伝統に欠けるが）、土地の言葉もはっきりとしたものはない。ここを新天地と思って来た人はすべて受け入れる。まさにエブリバディ・ウェルカムの土地柄なのである。ファイターズの選手の多くは札幌に住み定着している。

グローバリズムに勝ち抜く知恵はここにもある。要は、人々が住みたい暮らしたい土地であること。言うまでもなく、自然環境、そして教育環境が良いことも子供のいる人には

大切な要素だ。この点、北海道はほぼ合格。全国で住んでみたい土地のいつも一番か二番だ。そして、第二の要素は、移った人々がずっと住みたいと思える要素。それが既に住んでいる人々の受容性だ。

さて、ここからがいわば本論。全国の景気回復を横目に北海道経済はひとり低迷が続けている。産学連携で乗り切ろうとか、新幹線だとか意見・構想は様々だが、強くなった野球に学ぶとしたら答えは明らか。

全国から技術、能力、意欲、元気のある人々に移ってきてもらう事だ。このシンプル極まりない方法を国の始まりから当然の事としてずっとやってきた国がある。それはアメリカだ。ハイテクだ、IT だと言っているけど、アメリカのそれを支えているのはインド人、そしてアジアの人々。もともと、この国は来るものは拒まずだった。浅海さんという読売新聞の北海道支社長が本（『アメリカ、多数派なき未来』NTT 出版）を書いているが、キーワードは多様性・ダイバーシティだ。

私の尊敬する北海道の経営者がいつも口にするセリフがある。それは、組織の清一色（チンイーソー、麻雀の上がり手のひとつ）はいかん。協同組織をみると同じようなタイプの人が多いのは事実。しかし、グローバリズムに向けた組織強化を考えると、人材ミックスを上手にやった野球界に学ぶことは大いにありそうだ。